

大邦日本の理想

法學博士
文學士

大川周明

植民政策に關する西洋人の著書を見ると、一般に同化政策主義を攻撃してゐる。其理由は表面合理的なるが如くにして、而も効果が少いと云ふにあつて、實例としては佛蘭西の失敗の經驗が擧げられてゐる。此の議論は我國にも其儘受入れられて、大抵の學者は皆、若し我國が臺灣、朝鮮、滿州等に同化主義を以て臨んだならば、必ず失敗するに違ひないと異口同音に主張してゐるが、予は之を以て大なる誤なりと信ずるものである。

第一に先づ、朝鮮臺灣等を所謂植民地と解することが間違つてゐる。植民地とは、本國から地理的遠隔の場所にあり、且つ人口稀薄にして、民族を異にし、文化程度を異にする土地を指して云ふのであつて、部分的には兎も角、大体に於ては文化の根據を同じくし、文字を同じくし、文化程度に徑庭を見ない日本對朝鮮、臺灣等の關係とは、頗る類を異にしてゐる。故に西洋の植民地に對する主義を以て之に

對すべきではない。若し強て例を異邦に求めるとすれば、歐州大戰以前に於てオーストリアが其領内の異民族を治めた政治、獨逸がエルサス・ロートリンゲンに對した政治こそ、多少の参考とすべきものであらう。

西洋の學者は只、佛蘭西が會てアルゼリア、チュニスに用ゐて、失敗した例のみを擧げて、同化政策が成功した實例には少しも著目してゐないが、羅馬が會て其プロピンスに對して採つた態度はどうであるか。羅馬對プロピンスの關係は日本對朝鮮臺灣の關係と恰も相類してゐるが、羅馬は自ら法律を以て其新領土を結び、之に悉く羅馬の法を布き、羅馬の文化を擴延することを理想とした。面も是等のプロピンスに住居した歐洲の諸民族は、啻に之に對して不滿を唱へなかつたのみならず、羅馬の色彩を以て染められることを寧ろ誇とし、熱心に羅馬の市民權を欲求した、これは確に同化政策を用ゐても失敗しないといふ立派な反證である。次に又、佛蘭西對エルサス・ロートリンゲンの關係はどうであるか、エルサス・ロートリンゲンは元來獨領であつたのを、佛蘭西が其勢威を振つて奪つた地であるが、佛蘭西政府は此の二州に對して同化主義を採り、其名前までも自國流にアルサス・ローレンと改めた程であるに拘らず、州民等は之に對して著しい反抗の勢を示さなかつたばかりでなく、百年經つか經たぬ間にすっかり同化されて、寧ろ佛蘭西人たることを誇とし、普佛戰爭の結果、祖國獨逸が之を奪回したことに對し

て却て不滿不平を表し、幾びか政治上の國難を惹起せしめた。これ亦同化主義が必ずしも不結果でないといふことを示す實證でなくて何であらう。要するに國家が偉大で、其國威國勢が旺盛でありさへすれば、新附の民は喜んで其同化政策に服するのである。

我が日本が臺灣、朝鮮等の統治に就いて、心すべきは此の點であつて、國力に缺陷があり、國勢の伸張が不十分であれば、如何なる善政を布いても太平の治を見ることは出来ないが、我國が大邦日本たるの實力を示し、其國威國勢が隆々たるに於ては、期せずしてよく治るのである。予は此の場合、我が日本が同化政策を用ゐて何の不都合もないと思ふ。

予は曾て大正十年爪哇に赴いたが、其時につくゞ感じた事がある。其前々年たる大正八年は、アジヤ全般に至つて日貨排斥の行はれた年で、北はハルビンから南はシンガポールまで悉く日貨を拒斥したが、その時に爪哇では反對に、日貨が盛に歡迎され、其結果南洋方面に對する貿易額は俄然として二倍半に達した。これは爪哇に於ける經濟上の實權を握つてゐる者が、臺灣人即ち民族的には福建人であるが爲めである。此等の福建人は、日本人としての國籍を有するが故に、實質上同種族たる支那人及び他の東洋諸國民よりも優等の待遇を受け、政治上、社會上、經濟上比較にならぬ程の便宜と利益とを得てゐる。爪哇が大勢に反して、ひとり日貨排斥の仲間に入らなかつたのは、さういふ理由からである、

若しも一個の爪哇に於てのみならず、日本人たることが世界何れの國に於ても有利であるならば、凡ての臺灣人凡ての朝鮮人を擧げて、日本人たることを大なる誇とするのは勿論であつて、乃ち此點から觀て予は、日本の朝鮮臺灣に對する政策の根本は、第一に先づ日本を本當に世界的に強くすることゝを切實に考へるものである。

二

然らば日本が世界に重きをなす大邦日本となるには、如何にすれば可いかと云ふに、最も捷徑で且つ實行の可能な方法は、日本海を中心に滿蒙並に東部西伯利に發展することである。

日本の今日は足りないものだらけであつて、第一に重要燃料としての石炭が三四十年後の生命を疑はれてゐるし、石油は明かに不足を告げて消費量の三分の二を米國に仰ぎ、曹達は其殆ど英國、鐵はこれ亦大多額を米國からの輸入に待ち、衣食住の重要素たる毛織物、綿は勿論、常食料たる米さへも、國産額だけでは供給不足を訴へてゐるといふ有様である。斯ういふ風に必需品に乏しい狭い國土に多數の人間が重なり合つてゐたのでは、行きつまりになるのは當然の事で、其結果として今日の日本人は往時の日本人に比べて餘程氣宇の狭い、せゝこましい人間になつてゐる觀があるのは痛嘆の至である。

祝詞などを讀んで見ても、我々の先祖の意氣込が如何に雄大であつたかと思像せられる。彼等は家一つ建てるにも皆、底つ磐根に宮柱太しき立て、千木高知つてゐたのである。今日の脆弱なバラックに小さく天地左右を區劃して住んでゐると雲泥の差である。

あの琵琶湖の小鮎が適切なる例證である如く、如何に雄健な民族性の人間も、狹隘な處に跼蹐し續けてゐると、習性の方で次第に小つばけな人間となり、少し氣宇の大きい人は、之を法螺吹として目するやうになる。予は日本人の全部が、速に斯かる悪習性から離脱し、祖先の精神に立返つて、日本海の彼岸に發展せんことを熱望するものである。

是等の對岸の地は、日本人の必要品を無限に埋藏してゐる所であつて、一個の撫順炭坑だけでも今尙十億噸以上の埋炭量を有すと稱せられ、炭坑の上層に在る五十五億噸の油頁岩の含油量は平均5%を唱へ、鐵の産地としてはバーセンテージこそ豊富でないが分量だけは無限にあると云はれる鞍山站があり設備が不完全で且つ生産費が米國に比して高い爲め、今の所では到底世界的に競争は出來ないとしても、尙萬一の場合自國の需要を充すことが出來るのである。其外にもアルミニウムは煙台炭坑附近の粘土に殆ど無盡藏に含まれてゐるし、曹達の原料もこれ亦頗る豊富であるから、智慧の働かせ方一つで、輸入を防遏することは決して困難でないのである。

次に食糧問題も同様であつて、適當な方法で滿州に水田を作るならば、一年二千五百萬石乃至三千萬石位の米は立派に收穫することが出来る。これは決して予一人の見ではないのであつて、苟くも活眼を有する者あらば、直に看取し得る所である、然るに此の看易き事實を無視して、徒に生活必需品の不足に苦しみ、徒に懊惱を重ねてゐるのは解し難い事である。

予が近頃讀んだ米國農政學者の論文に依ると、彼は約三ヶ月に亘つて日本の農作地を視察した結果に基いて、南部アメリカに米作を奨励すべしといふ説を主張して曰く、日本は我がアメリカを以て米國と呼んでゐる。是は非常に面白い言葉で、早晚アメリカが日本の米の國たるべき運命を豫示するものである、日本の農業は合理的に成立してゐない、隨つて其農産品は莫大に高き生産費を要し、例へば米一升作るにも實費が三十五錢もかゝる、所が之を南部アメリカで作るとすれば、僅に十仙乃至十二仙で足るのである。之を太平洋岸から日本に輸送するとしても其運賃は僅少なものであるから、これが實行せられれば、日本では米を作るものがなくなり、我がアメリカからの輸出は、無限に繼續するであらうと、實に人を愚にした議論であるが、日本人としては眞面目に考へなければならぬ問題であつて、實際今日の如くに地價が漸次に昂騰し、然も土地其ものは既に使ひ疲らされて多額の施肥を要する上に、勞銀も亦高きを加へるといふやうな状態では、我國の農業は不合理の産業たるを免れないのである。だから今

のうちに早く、米及び其他の食料品を廉價に供給し得る方途を講じて、米まで米國の輸入に待たねばならぬやうな將來の悲境から免れるやうにせねばならぬ、しかも若し予の主張の如く、滿州を利用するならば、米の生産額に於て大に増加することを得るばかりでなく、生産費も現在より遙に安くて足るのである。

即ち以上の諸點から考へて、我々は大邦日本の理想を實現するため、目を對岸の大陸に放ち、滿州並に蒙古、露領西伯利等に活躍することが必要であると思ふ。若し我が日本人にして今日此策に出でなかつたならば、到底長く大國の地位を保つことは不可能であらう。予は一年に一回滿州に赴く毎に、必ず旅順に立寄つて日露戰役の舊蹟を弔うて來るのを常とするが、爾靈山上に獨り立つて往時をしのぶ毎に、感慨無量、脚下の地中にある白骨が物言ふ如く覺え、折角三十萬の生命を犠牲として作つた土臺の上に、空しく雜草を繁茂せしめて、何人も其處に殿堂を築くものがなく今や其土臺さへも崩壊し始めて來たことを、痛切に遺憾とせざるを得ないのである。あゝ抑々これは 明治大帝の大御心に副ひ奉る所以であらうか。



池邊眞榛曰く

學文は事を正しくするを本とすることなれば、たとひ百千年の古書ならむにも、訂さるべき
ほどは、正す可きなり、大同の宿彌と寛政の大人とは千年をへだつれど、其深切なる篤志は、
露ばかりも違ひなければ、今已等が、其の正きに依れりさならば、宿彌も喜ばしく思し給ふ
らむ、私事ならねば、よしいかならむとも、名聞に拘はるべき事ならざるよしは、いくたび
もまなしきこえなむかし

(古語拾遺新註卷六)